

日本地衣学会

No.50

ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

| | | |
|----|----------------------------|-----|
| 目次 | 会員通信..... | 173 |
| | 雲南地衣類調査行2005（その2）／原田浩..... | 173 |

会員通信 From Members

雲南地衣類調査行 2005（その2）

大囲山を後にした我々は曲がりくねった山道を下り再び紅河ほとりの蔓耗 Manhao へ。これからは紅河沿いにさかのぼる快適な舗装道路が続く。やがて南西に折れ、元陽 Yuanyan に至る（図1を参照）。ここでは、とても興味深い風景に出会った。

元陽 Yuanyan の棚田と樹花カラタチゴケ

同じ元陽でも、古い街（老街）と新しい街（新街）がある。古い街は標高約 1700m のの上にある。この付近は山の上は水が豊かで、至るところで標高差数百メートルにわたり棚田になっている。田植えの風景を求め、



図1. 調査ルート。今回の話題となる元陽は昆明のほぼ真南に位置する。



図2. 元陽のレストランの食材の陳列棚。樹花（カラタチゴケ；矢印）がタニシと並んでいた。

2月には雲南はもとより世界各地から観光客が訪れるのだという。かく言う王さんも、家族と時々訪れるのだという。我々が山上の古い街を訪れたときは、ひどい濃霧だった。折角の観光スポットも写真どころではない。「この景色はすばらしいのだ」という話だけで、私としては想像するしかなかった。確かに、その後の移動経路沿いには各所に大規模な棚田群があり、というよりも



図3. 樹花（カラタチゴケ）を使った料理。彩りと食感は良かった。

棚田だらけであった。日本では近年、棚田が話題になっているが、ここの雄大な風景を見ると、いかにも日本の棚田がこじんまりとしたものと感じざるを得ない。ちなみにインターネットで「元陽（あるいは雲南）棚田（あるいは梯田）」をキーワードで検索すると、美しい景色の写真を掲載しているサイトがいくつもあるので、そちらをご覧ください。あるサイトによると、元陽近くの多いところでは5000段もの段になっているの

だということだ。また、ここの棚田群は最近になって、世界遺産に登録申請されたのだという。「世界遺産 棚田 雲南」のキーワードで、幾つかのサイトで確認できる。まだ日本では有名ではないが、世界遺産に登録でもされれば、観光客がどっと押し寄せることになるだろう。

さて、山上の古い元陽の街には適当な（快適そうな）

宿もあるのだが、この異常な寒さの中では耐えられない（暖房が無いことが多い）と判断し、山の下の新しい街に泊まることにした。

山の下の新街のあるレストランで夕食をとることにした。いつものように、厨房で食材を吟味し、料理を注文する王さんが、食材を並べてある棚の中にある物を見つけた。水に戻した樹花、つまりカラタチゴケ



図4. 元陽郊外の棚田。中央の傾いた木はサルオガセで覆われていた。右側の木立は大型地衣がたくさんあった。

があったのだ(図2)。生きている時は淡い黄緑色だが、食材になると赤茶色であるため、野外でカラタチゴケを見慣れた者には、それがすぐに同じものであると確認することはなかなか難しい。前回の調査では大理と昆明で食す機会があり、とてもうまかったことを記憶している。ただし、そのときは適当なカメラを持っていなかったのので、本誌で紹介することができなかったが、今回はそれが実現できるというわけだ。さあ、待ってました。前回は卵とじにしてあったが(もう1回はどうだったか忘れた)、今回はニラと一緒に炒めてある。彩りは良い、まずは写真撮影(図3)。そして箸を伸ばす。・・・塩味がほとんど付いてないのにやけに油っこさだけが際立ち、まずくてがっかりだった。樹花の食感だけは良かった。

翌朝、やはり濃霧の中を古い遠陽の街を過ぎ、やがて霧がかかっていない場所(図4)を見つけ調査を開始した。田んぼの周りの樹は大型地衣で覆われていた。サルオガセ属 *Usnea*、キンブチゴケ *Pseudocyphellaria aurata*、ウメノキゴケ属 *Parmotrema*、そしてカラタチゴケ *Ramalina conduplicans*、つまり樹花。田んぼの周りにこれだけたくさんの樹花があれば(図5)、土地の人々に食べようという気が起こったのも不思議ではないなどと、思うのであった。それにしても樹花とは良くぞ名づけたものだ。

このカラタチゴケは日本では主に冷温帯に分布する種であり、山地の渓谷沿いの落葉広葉樹の幹や枝によく生えている。このため、雲南のこの地のように、田んぼの周りの木に生えるという光景はあまり一般的ではない。少なくとも関東以西の低地では、ウメノキゴケ



図5. 水田脇の樹幹には樹花(カラタチゴケ)が多い。



図6. キンブチゴケがひときわ目を引いた。

Parmotrema tinctorum やマツゲゴケ *Rimelia clavulifera* など灰白色ないし灰緑色の葉状地衣がピタッと樹皮に張り付くのが見られるくらいで、このように立体的であることはまずない。また、濡れたキンブチゴケの鮮やかな緑色と、鮮黄色の擬盃点がとりわけ華を添えていた（図6）。

このときが私の雲南におけるキンブチゴケとの最初の出会だった。雲南南部にはごく普通にあると、このとき王さんから聞いた。前回と前々回の調査では、もっと寒い雲南の北西部を訪れ一度も見る機会がなかったのだ。日本では、この地衣類は、暖温帯付近に分布するのだが、出現頻度が極めて低く、絶滅が心配される種類

だ。私の住む千葉県では、現在は2箇所でしか生育が確認できない。また私は、それ以外の場所で見ただけで無かった。昔は雲南のようにたくさんあったとは思えないが、すくなくとも明治時代に日本に植物分類学が芽吹いた後、植物採集家によって度々採集されたことも減少の一因であったろう。特に植物の採集地として有名であった千葉県南部の清澄山の個体群は、採集によって絶滅したことはほぼ間違いない。文献上と標本として記録が残っている場所だ。この地衣類の派手な姿が、多くの採集家の目を引いてしまったことは、この地衣類にとって不幸であった。（つづく）

（原田 浩：千葉県立中央博物館）

●複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌42号148ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 42, p. 148 of this publication.

日本地衣学会ニュースレター 50号

発行日：2005年 2月 28日

編集：原田浩・岡本達哉・木下靖浩・棚橋孝雄

発行者・発行所：日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城の中野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内

©2005 日本地衣学会 (© 2005 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複写等は固くお断りいたします。